

主 題：神への献身

聖書箇所：列王記第一 8章56－61節

私たちはお互いに本当に長い間親しい関係を持つことができています。私たちがともに働きを始めた頃、ここにいる方々の何人かはまだほんの子どもだったことを覚えています。その子どもたちが今こうしてここに来て働きができるようになったことを感謝しています。この機会は私たちの教会にとっても非常に大きな祝福になっています。この浜寺での働きに参加できることはバレー・バイブル教会（VBC）のメンバーにとっても大きな励ましであり、私たちの教会を強めて行く助けになっています。皆さんの愛ともてなし、助けに感謝しています。私にとっては3回目の来日ですが、皆さんとともにいること、みことばを忠実に宣べ伝えようとする教会の皆さんといっしょに働きをすることができるといことは何よりの特権であり、喜びです。そのようにみことばを忠実に宣べ伝える働きは、アメリカにおいても非常に珍しいものですが、日本ではもっと貴重な働きであることを知っていますから、こうして、この場において皆さんとともに働きができるというのは非常な特権であると私は思っています。このような特別な出来事は私たちの人生に特別な思い出を作ります。このような特別な出来事を通して、神はそれを用いて、私たちがより神に近づくことができるように働いてくださいます。VBCではまもなくこのような特別な出来事を体験する機会を持ちます。2週間後に私たちはイースター礼拝をもちますが、毎年、このイースターの時に私たちはイエス・キリストの死と復活を覚えて礼拝をもちます。そして、私たちは毎週日曜日に集まって来て、そのことを思い出すだけでなく、神がどのように素晴らしい働きを私たちのうちに為してくださるのかということを感じて感謝して集まるのです。けれども、今年のイースターは私たちにとって特別な意味をもっています。なぜなら、この47年間ずっと礼拝をもって来た礼拝堂でもたれる最後の礼拝となるからです。4月15日からは新会堂で礼拝をもつことができるようになります。このことは人生に一度しかないような、教会の歴史の中にあっても1度しか経験しないような大きな出来事です。11年前の来日時には、浜寺でも教育館建設がなされたところでしたが、浜寺はそのことによってより大きな働きが進められて行ったと思います。このような建物がなければ近隣の方々への様々な働き、たとえば、JOYJOY4DAYSの働きなどをすることは困難だったと思います。そして、神が皆さんに与えてくださった建物を通して、神の栄光を様々な形で現わしてくださったことを私は知っています。私たちが願うことは、神が私たちに与えてくださった新しい建物を通して同じようにしてくださることです。

このことを考えて行くとき私が思い浮かべたことは、聖書の中でこのような出来事を通して神が人々のうちに働きを為してくださった、そのことです。それらは確かにたくさんありますが、特に一つの事柄に私の心は引かれて行きました。その出来事は神殿が建築されてそれが神にささげられたその時の様子です。人々はこのような特別な出来事を守ろうとします。神殿を建てたソロモンがその神殿をささげるという特別なことはI列王記8章に記されています。そこを開くに当たって、皆さんにお伝えすることは、8章でソロモンが語っているすべてのことを今日話そうとは思っていないということです。

○ソロモンの祈りの態度

I列王記8章で、ソロモンは非常に長い、しかも、素晴らしい祈りをささげています。それらを見て行きたいのですが時間がありません。そこで、この祈りの後に書かれているこの祈りの内容をまとめたようなところを見たいと思います。ここでソロモンは祈った内容を要約して人々に伝えるのです。この出来事は紀元前959年に起こったことです。8：54－61を読みましょう。

「こうして、ソロモンは、この祈りと願いをことごとく主にささげ終わった。彼はそれまで、ひざまずいて、両手を天に差し伸ばしていた主の祭壇の前から立ち上がり、：55 まっすぐ立って、イスラエルの全集団を大声で祝福して言った。：56 「約束どおり、ご自分の民イスラエルに安住の地をお与えになった主はほむべきかな。しもベモーセを通して告げられた良い約束はみな、一つもたがわなかった。：57 私たちの神、主は、私たちの先祖とともにおられたように、私たちとともにいて、私たちを見放さず、私たちを見捨てられませんように。：58 私たちの心を主に傾けさせ、私たちが主のすべての道に歩み、私たちの先祖にお命じになった命令と、おきてと、定めとを守るようにさせてください。：59 私が主の御前で願ったことばが、昼も夜も、私たちの神、主のみそば近くにあって、日常のことにおいても、しもべの言い分や、御民イスラエルの言い分を正しく聞き入れてくださいますように。：60 地上のすべての国々の民が、主こそ神であり、ほかに神はないことを知るようになるためです。：61 あなたがたは、私たちの神、主と心を全く一つにし、主のおきてに歩み、今日のように、主の命令を守らなければならない。」

ソロモンがこの祈りを終えたときに、彼はひざまずいていたその場から立ち上がり手を上げていました。興味深いことは、8：22で彼が祈り始めたとき、彼は手を上げて立っていたと記されています。

ですから、彼はこの祈りの最中にその姿勢を変えていたのです。ここで私たちが覚えておくべきことは、私たちがどのような姿勢で祈るのかということは余り重要ではないということ、問題は私たちの姿勢ではなくて私たちの態度だったのです。彼は祈り終わって立ち上がって人々に話し始めるのですが、その中で彼は段取りをもってしっかり話して行くのです。最初に、彼は神への賛美をもって話し始めます。それは、まさに彼が祈りを始めたその始まりと同じものでした。私たちが神について話を始めるとき、神に祈るときに私たちが始めることは、神がどのような方であるのかを私たちが認めるがゆえに、そこには常に感謝や賛美が出て来ます。ソロモンは「**主はほむべきかな**」と始めています。神のすばらしい御名を賛美しているのです。

○ソロモンが神をほめたたえた理由

56節の初めに、ソロモンはなぜこの神をほめたたえるのか、その理由を述べています。それは神はご自分の民、イスラエルに対して安息を与えてくださっているからだと言います。この安息という概念は聖書の中にあって非常に重要な概念です。この安息がなぜ与えられるのかというと、贖われた場所というのがあった、そこから贖われたから安息があったのです。申命記12:10を見ましょう。そこでどのような安息が与えられているのか、何の安息について話しているのかを皆さんに示したいと思います。12:10-11a「**あなたがたは、ヨルダンを渡り、あなたがたの神、主があなたがたに受け継がせようとしておられる地に住み、主があなたがたの回りの敵をことごとく取り除いてあなたがたを休ませ、あなたがたが安らかに住むようになるなら、**」11「**あなたがたの神、主が、御名を住まわせるために選ぶ場所へ、私があなたがたに命じるすべての物を持って行かなければならない。**」、この安息というのは、彼らが捕らわれていた地から出て行って、彼らに与えられていた約束の地にあって、彼らが完全な守りの中に住むことができるという、その約束だったのです。このことはヘブル人への手紙3章や5章で見ると、イスラエルの民が敵から解放されて約束の地へとやって来ることというのは、私たち自身の罪という敵からの解放、そして、私たちが待っている神の永遠の安息というものとを対比されています。イスラエルの民が約束を受けて、安息の地へ入れられること、奴隷の状態から解放されて安息へ連れて行かれるのと同じように、私たちも罪から解放されて私たちが待ち受けているすばらしい安息へ入れられることが約束されているのです。この56節を見ると、その約束がどれほど強調されているかを見ることができます。ソロモンは約束通りにその良い約束はみな与えられたと言います。その良い約束のことばひとつも守られなかったことはない、すべてが守られたと言います。この約束はそれ故に私たちが確信することができる、全く失われることがないことを知ることができます。神がイスラエルの民に約束を成就してくださった、ひとつもたがうことなく成就してくださったことを知るがゆえに、私たちは私たちに与えられているその約束も同じように成就することを確信することができます。神が約束された良い約束がひとつもたがわなかったことを私たちが知っているゆえです。私たちは神の真実性をほめたたえることができます。そして、未来を見て、そこに私たちは大きな確信と信頼をもって神をたたえることができます。そして、このようなほめたたえがあった後、神への確信というのは、ソロモンが祈りの中で祈った神に対する懇願というものにもう一度記されています。それゆえ、ソロモンは三つの事柄について祈るのです。

○ソロモンの懇願

1. 私たちとともにいてください

57節「**私たちの神、主は、私たちの先祖とともにおられたように、私たちとともにいて、私たちを見放さず、私たちを見捨てられませんように。**」、神は荒野において先祖たちとともに契約の幕屋といっしょにそこにいてくださったのです。ソロモンが神殿を建てた目的は、それと同じように、この約束の地にあって神がイスラエルの民とともにいてくださるようという思いがあったのです。イエスがこの地上にやって来られたときに、神はこのイエス・キリストとともにおられました。イエスの名は「インマヌエル」といい、それは「神が私たちとともにいる」という意味でした。ソロモンが祈った祈り「神さま、私たちとともにいてください」という祈りは、イエス・キリストによって永遠に成就したのです。

今日、神の神殿はいったいどこにあるでしょう？それは二つの場所にあります。一つは、クリスチャン一人ひとりの中にあります。Iコリント6:19で教える通りです。「**あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。**」、この「神殿」というのは単数形で書かれています。ここで言われていることは、聖霊が一人ひとりの信徒のうちに宿ってくださっているということを教えているのです。けれども同時に、この神殿は一人ひとりの信徒だけでなく、その信徒たちが集まったその場にも存在するのです。Iコリント3:16「**あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。**」、ここで使われている「あなたがた」ということばは複数形です。聖霊なる神は信徒たちが集まったその一致したグループの中に宿っておられるということを言うのです。神が私たちのうちに宿ってくださるということは一時的なものではありません。ソロモンが祈った57節の祈りには「**私たちを見放さず、私た**

ちを見捨てられませんように。」という祈りが加えられています。私たちには約束が与えられています。それは神が私たちを見放さず見捨てることがないという約束です。ヘブル13：5「…主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」、そして、6節「主は私の助け手です。私は恐れません。人間が、私に対して何ができましょう。」と続きます。神が私たちとともにいてくださるというその事実は、神が私たちを決して見放すことがないという確信を生み出すのです。このソロモンが祈ったことでもうすでに私たちに与えられたものはこれだけではありません。

2. 聖霊によって主の道に歩むように助けてください

58節「私たちの心を主に傾けさせ、私たちが主のすべての道に歩み、私たちの先祖にお命じになった命令と、おきてと、定めとを守るようにさせてください。」、これは今日どのように起こっているでしょう？私たちのうちに宿っている聖霊の力によって達成されています。神は私たちのうちに聖霊を宿して下さって私たちが神の求める方向へと進んで行くことができるようにしてくださっているのです。神は私たちがクリスチャンとしての人生を自分で歩むようにと、私たちをそこで見放すのではなく、私たちがその歩みができるように助けてくださるのです。パウロがピリピの人たちに手紙を書いたときに、2：12で「そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いを達成してください。」と命じました。彼はそこでとどまることをしなかったのです。続いて13節に「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。」と、主なる神は私たちのうちに働いてくださって、神が願っていることを私たちがしたいと願うように、それをできるように助けてくださるのです。

3. 神が祈りを聞いてくださるように

もう一つソロモンが神に願ったことは、神が彼の祈りを聞いてくださるということです。59節「私が主の御前で願ったことばが、昼も夜も、私たちの神、主のみそば近くにあって、日常のことにおいても、しもべの言い分や、御民イスラエルの言い分を正しく聞き入れてくださいますように。」、これもこれまでの二つと同じように、神が私たちにもうすでにかなえてくださったことです。ヨハネ15：5でイエスはこのように言われます。「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」、この神のうちにとどまるということには約束が付随しています。7節に記されているように「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。」、イエスがここで約束することは、もし、あなたがわたしのことばのうちにとどまるなら、イエスは私たちの心のうちにある願い、祈りに答えてくださると言います。その理由は、私たちの心がイエスの方に向かって進んでいるからです。もし、神のことばが私たちのうちに確かにとどまり、それが生きているなら、そのみことばによって聖霊が働いて私たちの心が神の心、願いと同じものとなるように、私たちの心を変えてくださるのです。神がそのことをしてくださるときに私たちは大胆に確信をもつことができるのです。「神は私のもっている願いをかなえてくださる」と。ソロモンが祈った一つ一つの事柄、神は彼の祈りに真実をもって誠実に答えてくださるのです。その事実というのは、私たちのうちにもっと神をほめたたえたいという、その願いを生み出すはずです。

次の節、60節はこれらの事柄すべての目的を現わしています。「地上のすべての国々の民が、主こそ神であり、ほかに神はないことを知るようになるためです。」と。神殿が造られたこと、その目的は地上にいるすべての人々が例外なくこの神を知るためだと言うのです。このことはソロモンがその祈りの中で(8：43)祈ったことです。「あなたご自身が、あなたの御住まいの所である天でこれを聞き、その外国人があなたに向かって願うことをすべてかなえてください。そうすれば、この地のすべての民が御名を知り、あなたの民イスラエルと同じように、あなたを恐れるようになり、私の建てたこの宮では、御名が呼び求められなくてはならないことを知るようになるでしょう。」と、イスラエルの民というのはイスラエルの人たちだけのためにこの神殿を建てるべきではなかったのです。これはすべての人が神のもとに来ることができるように、その証のために建てられたのです。神は私たちに聖霊を与えてくださいました。そして、私たちを聖霊の宮と呼んでくださっているのですが、それは私たちのためだけにあるのではないのです。私たちのうちに聖霊が宿って私たちに聖さを生み出してくださるのは、一つの目的があるからです。それは私たちの周りにいるすべての人たちが神を知るようになるためです。そして、この目的こそが私たちのうちにあって、もっとも主のために人々に証を立てて行きたいという思いを生み出すのです。自分自身のために、自分たちだけのためにクリスチャンとしての生涯を送るのではなくて、他の人たちのために送るのです。

ソロモンの最後のことば61節では「あなたがたは、私たちの神、主と心を全く一つにし、主のおきてに歩み、今日のように、主の命令を守らなければならない。」と言います。この順序がとても重要です。私たちは神に対する献身から始めるのです。心の中にある神への献身というのは主の前に主の道をしっかり歩む

という行動に変わります。そして、「**今日のように**」ということばは、今日まさにそうであるように明日もあさってもずっと継続的に最後までそのような歩みを続けなければいけないということを示唆しています。ソロモンにはいったいこの後どのようなことが起こっていったでしょう？この出来事が起こった後、ソロモンの生涯には多くの姦淫と罪がありました。私たちも同じように、ときに特別な出来事の中にあって、私は神に従順に従いたいというすばらしい思いをもつことがあります。私たちは心の中にすばらしい献身をもって、神に従って行きたいという願いをもって、毎日これから先ずっと神に従って行きますという願いを持ちます。けれども、ソロモンのように私たちも未来においてつまづくことがあるかもしれません。この神殿の献堂式に集まってきたイスラエルの人たちも、この先、神に背を向けました。事実、この書が書かれたとき、対象となる読者というのは捕囚の中にいました。それゆえに、この書は捕囚の中にあって神からのさばきを受けている、その人たちに宛てられたのです。彼らは自分たちの民がどのような献身をもって神に仕えようとしていたのかを思い起こすことができたのです。そして、それゆえに、彼らがもう一度神の前に立ち返ることができるようにと。私たちも同じように神に立ち返ることができます。これらのことばの直後に書かれている出来事は、8：63にあるようにいけにえがささげられています。「**ソロモンは主へのいけにえとして和解のいけにえをささげた。すなわち牛二万二千頭と羊十二万頭。こうして、王とすべてのイスラエル人は主の宮を奉獻した。**」、これは印刷ミスではありません。彼らは65節にあるように「**七日と七日、すなわち十四日間、**」これらすべてのいけにえがささげられるようにしたのです。14日間にささげられたいけにえの額というのは、この教会の建物の総額と私たちバレーバイブル教会が建てるものの総額よりも多くの額がそこでささげられているのです。それらすべては彼らの罪が贖われることを願ってささげられたのです。しかし、私たちはヘブル10：4で見るようにこのような牛や羊の血が私たちの罪を取り除くことはできないことを知っています。「**雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません。**」。そして同時に、ヘブル10：14にあるように「**キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。**」と、一つのささげ物によって私たちは聖なる者とされるということを知っています。私たちはこのように多くのささげ物をささげなければならない、そうしなければ神の前に赦されないということがないことを感謝しなければいけません。なぜなら、イエス・キリストが一度、そのすばらしいささげ物、いけにえをささげてくださったゆえに、私たちは神の前に立ち返ることができるからです。このような特別な出来事の中にあって、私たちにとって最も大切なことはこのことです。